

本を選ぶ

NO.392 2018年(平成30年)1月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <くろん・ぼわん>澤田正春さんから手渡されたもの
- 印刷博物館ライブラリー 訪問記
- 鳥の目 67
- 帰ってきた図書館員 (52)
- 図書館を離れて (第37回)

●●●●●くろん・ぼわん●●●●●

澤田正春さんから手渡されたもの

「年の初めに毎年読んでいるんだ、『市民の図書館』を」。滋賀県立図書館の館長室で澤田正春さんのお話をお聞きしたのは、1998(平成10)年3月に県立図書館を退職される間近のことだっただろうか。北海道置戸町立図書館の館長、教育長を経て、1991(平成3)年4月から滋賀県立図書館の館長として招聘され7年間、図書館に力をつくしてこられた。1997年11月に能登川町立図書館・博物館を開館したばかりの私にとっては、これから澤田さんの傍らで図書館の仕事ができることを何よりのことと考えていたので、開館後5ヵ月足らずで退職されたのは衝撃的な出来事だったが、人を温かく包みこみ「県立図書館の最も重要な仕事は、市町村立図書館への資料提供である」ことを体現された県立図書館長の姿を心に刻むことができたのは望外のことだった。退職後、北海道に帰られていた澤田さんが昨年5月20日に亡くなられた(享年78歳)という知らせをその直後にうけた。

澤田さんが亡くなられて初めて迎える年の初め、冒頭の澤田さんの言葉が、その言葉を耳にした時の驚きと共に私の中に蘇ってきた。1965年、1台の移動図書館から図書館を始め、日本の図書館を根底から変革する活動を展開した日野市立図書館を核とする実践を「広く公共図書館共有のものとし、その

活動を飛躍的に発展させるため」1970年に日本図書館協会から刊行されたのが『市民の図書館』だ。(翌年に増補版『市民の図書館』が出版されたのは、澤田さんが農林業を主たる産業とする置戸町で図書館を手掛け始めて7年目の時だ。その1年後に書かれた澤田さんの「町村図書館の立場から—『市民の図書館』をどう読んだか—(『山あいの図書館と地域のくらし置戸図書館と共に歩んで』日本図書館協会)という小文では、過疎の町の小さな図書館(人口1万未満)でもこのような活動ができるのだと全国の図書館員を震撼させた実践がどのような読み方の基に生み出されたかが明確に描かれている。(町の面積約529km²、淡路島や東京23区に匹敵する広大な広さ、1年の半分近くは雪や厳しい寒さの中にある地で、1976年から3年連続、合計5回、人口一人当たり貸し出し全国一の活動。)『市民の図書館』が対象としたのは人口5万人以上の中小都市の図書館である。しかし、澤田さんは、人口8700人の町で『市民の図書館』をそのままの尺度で導入しようとする。導入することにより当然できる断層を自覚することによって、町村における図書館のあり方をさぐる。というも「町立であっても図書館は図書館であり、公共図書館の基本的機能の上に立つべきである」から。

「町のどこに住んでいてもだれもが読みたい本を借りることができる」図書館づくりを目指す上で、澤田さんから手渡されたものの底深さを思う。(オケクラフトに始まる図書館とまちづくりの豊かな実践は前掲書の一読を) (才津原 哲弘)

印刷博物館ライブラリー 訪問記

山口 由美

本格的な冬に一步一步近づいている小春日和の一日、「印刷博物館」にあるライブラリーを訪ねた。場所は、東京都文京区、後樂園の近く。神田川が流れ、木々が紅葉して空が青い。離れたところからも目立つ高層建築、銀色に光る凸版印刷小石川ビルの隣に「印刷博物館」はある。

「印刷博物館」は、2000年の開館。コミュニケーションメディアとしての印刷の価値や可能性を紹介し、印刷の過去、現在、未来を伝える展示を行っている。博物館には、展覧会やイベントを開催するギャラリー、印刷の歴史と文化との関わりが学べる総合展示ゾーン、活版印刷が体験できる印刷工房、最先端技術を駆使した映像が見られるVRシアター、ライブラリーなどがある。盛りだくさんの施設だ。

わたしが訪れた日、エントランスフロアのP&Pギャラリーでは、「現代日本のパッケージ2017」と題して日本の三代パッケージコンクールの受賞作品を紹介していた。なじみのある商品もあり、消費者であるわたしたちにも、包装のデザインや機能の進化をわかり易く伝えてくれる展覧会だった。

「印刷」をめぐるライブラリーとは

さて、ライブラリーである。ライブラリーは、このエントランスフロアのP&Pギャラリーの入り口にある。ガラスの壁で仕切られた閲覧室と横にカウンター、さらにとりには図書検索用のパソコンとデスクが並ぶスペースがあり、奥へと続いている。全体として、広いとはいえない空間だが、落ち着いた雰囲気がある。明るくこじんまりとした閲覧室に入ってみると、印刷業界の新聞や雑誌のほか、印刷、グラフィック、デザイン関係の雑誌、図書などがずらりと並んでいる。ここにある色彩鮮やかな本を眺めているだけでも楽しくて、時間を忘れてしまいそうだが、驚いたことに、これらはこのライブラリーの1パーセントに過ぎないのだという。書庫には、印刷およびその関連

分野を中心に約5万冊を所蔵。収集分野は、印刷全般のほか、出版、広告、文字、活字、アートデザイン、版画、インキ、紙、等々。蔵書は、カウンターへリクエストすれば、閲覧室で手に取ることができる。

蔵書を閲覧するには、「情報コーナー」のパソコンで検索し、リクエストをプリントアウトする。あるいは、指定用紙に記入して、カウンターへ持っていけば、親切なスタッフが目指す1冊をあっという間に見つけてくれるだろう。蔵書の検索は、インターネット経由で、あらかじめ探しておくこともできるので、自宅ですっきりと選ぶのもいい。

閉架図書を手にして

今回、閲覧したのは、『文化と印刷』（1925年 大阪出版社、島屋政一著）、大正時代の本。出来るだけ古くて貴重なものを見てみたかった。「印刷術と教育事業、活版印刷の使命、カーチス印刷出版会社…」という見出しが並ぶ。印刷の歴史、欧米の印刷技術、印刷会社の実態などが紹介されているのだが、特に米国カーチス印刷出版会社の従業員のための図書室、休憩室等の厚生施設を報告している記事は、面白い。「印刷会社の待遇」として、社内の保険が研究されているところも興味深かった。

たしかに100年前には、インターネットなどはなく、印刷こそが、情報の伝達を担っていた重要なものだった。文化のみならず、経済の情報も印刷技術によって伝えられ、支えられ、こうして発展してきたのだのだと思うと感慨深い。

そして、閲覧のもう一冊は、『鉄道旅行案内』（1936年 鉄道省）。この本は、いわゆる鉄道の旅の案内だった。日本各地の観光名所の情報が、詳しく書かれている。旅館の情報もあり、まさしく旅本。地域ごとの路線図も挟み込まれている。あるページに小さなローカル路線の名前を見つけ、この時代に、あの路線はもう開通していたのかなどと興

味が尽きない。そして、この『鉄道旅行案内』は、なんといつても装丁が美しいのだ。布の表紙に五重塔が、裏表紙には松と桜が、色彩豊かに描かれている。古い本をじっくりと眺めていると、長い長い時を経て、いま私が手にしているこのことが、不思議という気分になってしまう。まるで、時間を旅しているような気になる。しみじみと、本はいいなあと思う。

また、「情報コーナー」では、ライブラリー所蔵の明治期の『印刷雑誌』、『印刷世界』をデジタル化したものを閲覧できるほか、印刷の知識についての映像、過去の企画展で制作した映像やCD-ROMの閲覧サービスもある。

閲覧の冊数制限は設けられていないので、いつまでもでもいてしまいそうなライブラリーだが、ぜひ、地下スペースにも足を運んでほしい。

企画展示と活版ワークショップ

ライブラリーを出て、すぐ左の地下へ向かうエスカレーターに乗る。降りるといきなり視界に飛び込んでくるのは、ラスコーの洞窟絵画、エジプトの壁画のレプリカ。ここからは、展示空間へのプロローグである。導入部でもある通路を行くと、企画展示ゾーンへ。この部屋では、印刷をテーマにしたさまざまな企画展示を行っている。この日、『キンダーブックの90年 童画と童謡でたどる子どもたちの世界』展を開催していた。幼稚園や保育園で読まれている『キンダーブック』といえ、きつと記憶にある方も多いのではないだろうか。会場には、創刊当時から、現代に至るまでの『キンダーブック』を展示。もちろん、見覚えのある懐かしい挿絵も見つけることができた。（この展覧



会は、1月14日で終了。）

次には、印刷の誕生から現代までを紹介した「総合展示ゾーン」が待っている。展示物には、説明の映像がついているので、楽しみながら詳しい知識を得ることができる。現存している中で世界最古の印刷物である『百万塔陀羅尼』(764年)や世界最小のマイクロブックなど貴重なものも。

「印刷博物館」では、ワークショップも人気だ。印刷工房「印刷の家」では、活版印刷でグリーティングカードやしおり等を作る体験ができる。そのあたたかみと味わいで、最近再び注目を集めている活版印刷。活字を拾い、小型の印刷機を動かすワークショップでは、ひとりひとり丁寧に指導してもらえるので、楽し

い思い出になることは間違いない。ワークショップの開催は、不定期なので、事前に調べる必要がある。HPで予約もできる。

ライブラリーの実力もさることながら、様々な魅力あふれる「印刷博物館」であった。

(やまぐち ゆみ：アートとつながる鎌倉)

《利用案内》

開館時間 : 10:00 ~ 18:00

閉架資料請求 : 10:00 ~ 17:30

閲覧室開室時間 : 10:00 ~ 17:50

休館日 : 印刷博物館休館日(毎週月曜日、ただし祝日の場合は翌日) 年末年始、およびP&Pギャラリー展示工事の都合により休館日が変更になることがあります。お問い合わせください。

代表電話 : 03-5840-2300

利用料金 : 無料(総合展示入場は、一般300円)

所在地 : 東京都文京区水道1丁目3番地3号
トッパン小石川ビル

鳥の目 67

—絶滅鳥ドードーが残したものは？ その2—

為貞 貞人

2016年発行の『絶滅鳥ドードーを追い求めた男—空飛ぶ侯爵、蜂須賀正氏 1903—53』(村上紀史郎著 藤原書店)は、旧阿波・徳島藩の16代(蜂須賀小六正勝から18代)の旧華族の鳥類学者蜂須賀正氏(はちすか・まさうじ)をスケールの大きい世界的な鳥類学者として評価しています。正氏はケンブリッジ大学で学び、大英博物館で鳥類学を専攻し、探検調査は全世界に及び、戦後日本の鳥類学の再建に貢献しました。その間、英国の大財閥で、1907年に大著『絶滅鳥大図鑑』を著した博物学者の男爵ウォルター・ロスチャイルドと親交を結び、大きな影響を受け、終生ドードーの研究に集中、没年の1953年ロンドンで『ドードーと近縁鳥類；マスカリン諸島の絶滅鳥類』(英文)が出版されました。

正氏の調査では、モーリシャス島のドードーは15羽が生きのままヨーロッパに運ばれ、記録に残る最後の1羽がジャワのバタヴィア(現ジャカルタ)に運ばれたあと、日本に向けて発送されたが、日本に届いた記録はないことになっていました。

最後の1羽が日本へ

この正氏の研究が2014年春、オランダで話題になり、5月3日の日刊紙 *NRC Handelsblad* に「最後のドードーが將軍へ」の見出しでドードーと日本に関する新事実が紹介されたことに、正氏伝記の著者村上さんはそのエピローグで注目しています。

この新聞記事は、2014年発行のオランダの学術雑誌『歴史生物学』(*Historical Biology*)に掲載された論文「ドードーと鹿、1647年日本への旅」の取材によるものです。論文の執筆者は自然画家でモーリシャス島の生物相を研究しているオランダ人のリア・ウインターズとイギリス自然史博物館の鳥類部門担当のジュリアン・P・ヒュームの二人。正氏の研究をもとに、日本に送られたというドードーの行方を追求し、オランダ・ハーグの国立中央文書館に保存されていた長崎オランダ商館長日記から、1647年8月29日、オランダ東インド会社の商船「ヤ

ング・プリンス」号が長崎に入港(湾口碇泊)した記録を発見しました。船には交易品と共に幕府首脳や將軍への贈り物として生きたドードーと白い鹿などが積まれていました(入港9月3日、動物の陸揚げは9月1日許可)。商館長日記の9月2日、長崎奉行の求めでドードーと白い鹿が奉行所に運ばれ、検分後出島に戻され、夕方福岡藩主黒田忠之(長崎奉行)がこれら動物を見るため商館に来ました。

9月6日、福岡藩主の使いが来て、長崎奉行の許して、白い鹿を買いたいという。友好のしるしとしてプレゼントしたいと申し出るが、それを断り代金を払って連れて帰りました。

このオランダ商館長日記は、もとは長崎出島のオランダ商館に保存されていましたが、1852年以後ハーグ市の国立中央文書館に収められたものです。

ところが、そのオランダ商館長の日記は『出島蘭館日誌』(村上直次郎訳)として1938年に出版され、戦後『長崎オランダ商館の日記』(全3冊岩波書店1956~58年)として再版されています。その第二輯の『ウイレルム・フェルスターヘンの日記』1647年9月2日の箇所には「奉行が鹿とドードー鳥の一覧を望まれ、それを届けたが直ちに返された」とドードーのオランダ語がそのまま訳されています。2005年にはオランダ商館長日記の新訳が、東京大学史料編纂所編纂で東京大学出版会から出ました。ここでは「知事の求めにより鹿とドードー鳥は見物のため」と訳されており、オランダでの「発見」に先立ち、わが国からドードーの日本上陸を発信できたはずです。

日記の9月8日には「正午過奉行の命を受けて、前記のおうむを他の鳥類と共に四国の領主松平隠岐様に渡した」(岩波版二輯)と記されています。この「前記のおうむ」はドードーとも思われ、当然ながら日記からドードーの記述は途絶えます。

正保4年家光の時代、最後の1羽であるドードーが長崎に上陸したのが事実なら、その行方を世界に明らかにする責務が日本にあると思います。

(ためさだ さだと；さいたま市図書館友の会)

帰ってきた図書館員 (52)

— 『ニッポンの食卓の今』に驚く—

山下 青葉

今から5年 (!) ほど前に鷹野祐子氏が本誌に執筆されていた記事をきっかけに、食に関する岩村暢子氏の著作を一通り読み、記事を書かせていただいた。

先般、鷹野氏がやはりこの欄で「孤食」の問題を取り上げておられたが、何という偶然かちょうど時期を同じくして岩村氏の四年ぶりの著作『残念和食にもワケがある 写真で見るニッポンの食卓の今』(中央公論新社刊。食卓調査の本としては7年ぶり!) が出版され、これは! と思い、読んだのであった。

前著『家族の勝手にしょ! : 写真274枚で見る食卓の喜劇』(新潮社2010)でも「お菓子の盛り合わせの朝食」「お皿の並ばない食卓」「味噌汁の回し飲み」など驚くような事例がこれでもかと出てきていたが、今回も、白飯はそれ自体に味がなく、おかずや汁物を必要とする面倒なものになり下がり(新米がそれだけで美味しいという概念が存在しなくなっている)、煮物や魚料理が作られなくなって、もう好物とか苦手ということですらなくなっている(学校が食育の一環として給食で出した煮物を子どもが食べられなかったことを、親が「食べられなくて当たり前」と言っている)、ミニトマト1個を「一汁三菜」のひとつと考えたり、生のキュウリ1本をおかずとして出すことを「素材をいかした」と回答するなど、事態はさらに進化(退化)していた。

鷹野氏が書かれていた孤食の問題もここでは、生活習慣や家族の変化で個食(孤食)が激増し、スマホやテレビを見ながらの食事が主流となったため、両手を使い(箸を持ち、茶碗を持ち上げる)、一皿では完結しない食事(和食)が敬遠されるようになったという分析になるのだった(であるからして、おにぎりが支持されているという皮肉なことになっているわけである)。食事がこのようなことになった原因のひとつとして、岩村氏は親世代から子世代への伝承がなされていないことをあげている。

食卓調査のアンケートに「得意料理・自慢料理」の項目があり、15年ほど前の調査では、得意・自

慢料理を「母親から教わった」という回答が6割あったのに今回の調査では4割に減少しておりその4割の中身も「結婚後」に「電話で聞いた」もので、しかも母親のやり方では手間がかかり面倒くさいので自己流にアレンジしてしまうというのが主流で、「ウチの母が作ってくれた餃子が食べなくなつて、ネットで作り方を調べた」という奇妙な発言があつたりするのだ。

前回の調査から7年たち、当時の母親は祖母の世代となり、その人達は戦争と敗戦後の食糧難でまともな食事をとった記憶がなく、子ども時代においしいと思って食べたものが「肉屋で買ってきたコロッケ」だった(『親の顔が見てみたい!』調査 家族を変えた昭和の生活史 中公文庫 2010) ということ、そもそもその時点で伝承ということは崩れてきているので、孫世代にあたる今回の調査対象となった人々が驚くような食生活の実態を口にしても、ある意味当然の流れということが言えるのではない。

今回は特にふれられていなかったが、前回の『家族の勝手にしょ!』の方では、このような食生活の結果、子どもの便秘が増加しているにもかかわらず、親たちがそれを「体質的な問題」「学校でのストレスのせい」として、食生活と全く結び付けていないことが問題視されていた。

この調査の対象となっているのは主婦で、主婦だから食事の支度をきちんとすべきということではないものの、家族の健康を預かることを主な役割として担う立場にいるのだから、自分だけで負担しないということも含めて、食生活のあり方をもっと意識して考えなければならないのではないかと思う。

「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されてからこの12月でまる4年になる。それ自体は誇らしいことではあるけれども、ここでいう和食は料亭で出される懐石料理や寿司のことであつて、自分達の日常的な食事は全く関係がないと思わざるを得ない。(やました あおば: 図書館員)

図書館を離れて (第37回)

—「ちびくろさんぼ」のドーナツ 続:“ドーナツ版”があった!—

並木 せつ子

トラのパターで“ドーナツを作った”という絵本がみつかった。1953年の「岩波子どもの本」から2008年の径書房刊まで、60点以上の「ちびくろさんぼ」に目を通して見つからなかったのに、たぶん探せないだろうとあきらめていたのである。ただ、1点だけ気になる本があった。作者、出版年、出版社、すべて不明の『黒坊物語』である。筋はほぼ「ちびくろさんぼ」と同じだが、トラが木の周りを回っているうちに溶けて死んでしまうところで終わる。「クロ坊ハ ジブンノ モノヲ トリカヘシテ オホヨロコビテ オウチヘ カヘリマシタ」と結ばれ、バターを持って帰るなど、その後の話は無い。

このカタカナの文章を読んでいるうち、もしかすると1953年より前に「ちびくろさんぼ」があったのではないか、という気がしてきた。原作が出版されたのは1899年だから、あっても不思議ではない。そこで、古い子ども雑誌などにあたってみることにした。

結論からいえば、“ドーナツ版「ちびくろさんぼ」”は、『コードモノクニ』1937年8月号(東京社)に「ザンボート虎」という題で載っていた(図1)。ヘレン・バンネルマン原作、文・記載無し、絵・山下謙一、全4ページに絵と文がつまった抄訳版である。最後は「オ母サンハ、ソノアブラデ オイシドーナツヲ タクサンコシラヘテクレマシタ。ザンボーハ ドーナツガアマリオイシカッタノデ 五十モタバタイフコトデス」(トラはとけてバターではなく油になった)。まぎれもなくドーナツである。私が子どもの頃見た絵本ではないと思うが、“ドーナツ版”は存在したのだった。

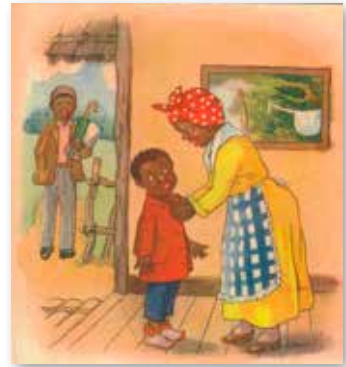
この「ザンボート虎」にはトラが4頭ではなく3頭しか出てこない。付録のリーフレットに掲載された『ザンボート虎』はなぜ面白いのかという文章の中で、波多野完治は、この話が子どもに好かれる要素の一つは、子どもの好む3回のくりかえしになっていることだと解説している。“子

どもの好む3回”にこだわって、あえて変えたのだろうか。ザンボーの食べたドーナツの数が、原作の169から50になっているのも、何か意図があったのかもしれない。『コードモノクニ』には、翌月号以降も「ザンボート象」「ザンボート鱈」(2作とも絵・横山薫二)が掲載された。こちらは原作者の記載が無い。



図1 『コードモノクニ』1937年8月号「ザンボート虎」部分

『コードモノクニ』にあるなら『キンダーブック』も、ということによって『フレーベル館100年史』(2008年)に掲載されている解題で探した。す



ると、本誌ではなく付録の『ツバメノオウチ』に掲載していることがわ

図2 『ツバメノオウチ』1937年2月号「クロンボノサンタクントラノオハナシ」部分

かった(図2)。「クロンボノサンタクントラノオハナシ」(『キンダーブック』1937年2月号付録)という題で、原作・文・絵とも記載されていない(バンネルマン自身の絵ではない)。全12ページ、大きな省略は無いものの、「ムカシ アフリカ ニ サンタ ト イフ・・・」で始まる。国はアフリカになっているし、名まえば親しみが持てるようにという配慮なのか、三太と同じサンタである。こちらはドーナツでもホットケーキでもなく「オカシ」で、「ハラーパイ」食べたと結んでいる。食べている絵が載っていないので、どんな「オカシ」なのか、わからないのは残念だ。

ここまできたらどこまでさかのぼれるか、さら

に調べてみたくなった。最初の「ちびくろさんぼ」は、明治40(1907)年の『東西お伽噺』(有楽社)に所収された「サンボの手柄」だった。この本は「英文英語叢書」の中の1冊で、英語を学ぶ人のための本であって、子どものための読みものではない。左ページが英語、右ページが忠実に訳した日本語、という対訳形式の参考書のようなもので、完訳である。ジャンボが傘と靴を買った場所は「勸行場」、バタを「牛酪」と訳しているところもあって時代が感じられる。そして作ったものは「焼き菓子」で、「溶けたるバタで油揚げにしました」となっていた。編集者は吉田幾次郎となっているが、訳者名や原作者であるバンナーマンの記載は無い。さし絵も無い。

次は大正13(1924)年の『赤い鳥』(8月号)に掲載された「虎」である。(図3)作者は村山吉雄となっているが、これは原稿募集しても集まらないため、鈴木三重吉自身が他人の名まえで発表したものだとか。昭和4(1929)年に自ら編んだ『童話集 十二の星』(春陽堂)には、鈴木三重吉の名で、同名・同内容の作品が掲載されている。主人公の名はザンボ。トラたちは木の周りで溶けるのではなく、「引きちぎったしっぽをくはへたまゝ、あふむきにたふれて死んでゐました。はッはッは」

という結末だった。したがってバターもホットケーキも無い。『赤い鳥』のほうにはさし絵がついているが、3人の名まえがあつて画家の特定はできなかつた。鈴木三重吉の没後、1950年に出版された『鈴木三重吉文庫 小学二年の巻』(さし絵・中村千尋 実業之日本社)には、この「虎」が「ザンボーととら」という題で載っている。3点ともバンナーマンの名は記載されていない。



図3 『赤い鳥』1924年8月号「虎」部分

(なみき せつこ:元図書館員)

【参考資料】『「コドモノクニ」総目次』(中村悦子他編 久山社 1998年) / 『さよならサンボ』(エリザベス・ヘイ著 平凡社 1993年) / 『鈴木三重吉童話全集 別巻』(文泉堂書店 1975年) / 『戦前の『ツバメノオウチ』の解題と細目』(棚橋美代子著 『研究「子どもと文化」題8号』)所収 ガリバー出版部 2000年)